

素 顔 拝 見



顎関節治療部 講師

荒 井 良 明

2002年はヨーロッパにおいて統一貨幣、ユーロが使われ始めた年です。この2002年の1年間を、私はドイツで歯科外科医として働きました。ドイツというよりヨーロッパで働いていたと言った方が的確かもしれません。それは、EU内では国境は事実上ないも同然で、人々は自由に国境を越えて買い物、旅行ができ、もちろん医療も受けることができるからです。

そのような体系の中では、隣国の言葉は話せて当然、わかって当然なのでしょう。診療初日に「ドイツ語、英語以外に何語を話すのか」と聞かれ、「日本語だけ」と答えると「隣国の中国語をなんでしゃべれないのか？」と大変不思議がられました。

私にしてみると、隣国なのにと中国語を話せないことを不思議に思われることが不思議でなりませんでした。ある時、患者の言っていることが全く分からず、本場のドイツ語は速く話されるとさっぱり解らんと困っていたところ、横から同僚が全く私の理解できない言葉で会話をし始め、その場を収めてくれたのです。後で聞くと、それはスペイン語だったのでした。そんなことが日常茶飯事、同じ診療室にいながらイタリア語、フランス語、スペイン語が当たり前のように話され、逆に通じないことの方が意外なので、彼等の感覚からすれば日本人と中国人はお互い会話できて当然なのでした。

こんなところがまさに“ヨーロッパ”。日本の中だけで生活していると理解し難い感覚です。

またそんな言葉が原因で、とても恥ずかしい思いもしました。3ヶ月も経つと埋伏抜歯で外科の基礎を学ぶようにという教授の計らいで、毎日親知らずの抜歯をするようになりました。8はドイツ語でAchtと書くので、親知らずの8番はAchterと呼びます。

ある日、私が前日の抜歯窩の洗浄をしようと、それは綺麗な若い女性にドイツ語で「今日は8番の洗浄をします。」と言ったところ、真っ赤な顔をして恥ずかしそうにうつむいてしまいました。何をそんなに恥ずかしがっているのか、私は訳がわかりませんでした。とりあえず洗浄して、次の予約を取って終わりにしました。するとその様子を横から見ていた同僚が私に「Afterの意味が解るか」と、げらげら笑いながら話しかけてきたのです。「8番」に決まっているだと答えると、それは「Achter!」とさらに笑いが止まりません。

ドイツ語の子音“ch”は日本語には無い独特の音で、敢えて日本語表記するなら「くはっ」を1語で言った感じとなりますが、日本語にある音で表すならば“八行音 = h”が一番近いものになります。そのため、日本人の耳には“ch”は“h”として聞こえ、また、その音の違いは大差ないものに感じられるので、発音も“h”となりがちです。

私の中途半端な発音では、「Achter」は、彼等には「After」としか聞こえていませんでした。しかし、それが意味するのは8番ではなく、誌上ではとても書けない言葉でありました。「Afterを洗浄する」と言われれば、うら若き女性が真っ赤になって当然です。

同僚によると、ヨーロッパ語圏では“ch”と“h”は絶対に違う音なので、混同しようがなく、その発音を言い分けられないのは考えられないことなのだそうです。これもまた日本人には理解し難い感覚です。

難しかったのは子音の発音ばかりでなくて、た

だの抜歯が困難を極めることが度々でした。とにかく皮質骨の厚いゲルマン人の骨は、たわむという感覚が無く、下顎の根先が彎曲した歯などを抜くのは一苦勞でした。そのかわり留学目的のインプラントの植立や骨移植は、豊富な骨量に加えて厚い歯肉も手伝って、極めて簡単でした。

1年後すべてを習得したつもりで意気揚々と帰国してみると、極めて抜歯が簡単で、インプラントの植立や骨移植が難しい患者さんが山のように待っていたのでした。そして我々には、日本人を対象者とした臨床研究が重要であることに改めて気が付いたのでした。

